

参加者一覧 02
連作欄 8首の連作 自由詠..... 03
テーマ詠欄 「野」 15
一首評 「そらよみ」..... 18
短歌で まちがいさがし..... 19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 20
クロスワード 21
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 22
次回予告・編集後記..... 23

うた
そら

Utasora

2024.
May

no.

20

5

うたそら 第20号

発行：2024.05.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

Twitter ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8首の連作 自由詠
 テーマ詠欄 「雲」
 一首評 「そらよみ」
 短歌リレーコラム 「望遠鏡」
 リレーエッセイ 「いちごいちえ」



短歌募集



第21号 24 6/30(日) 24時
 ・8首の連作 自由詠 ・テーマ詠「雲」1首

第22号 24 8/31(土) 24時
 ・8首の連作 自由詠 ・テーマ詠「夜」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

ほらかな春……のはずが、雨ふりの4月です。気候の不安定さに若干不調を抱えておりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。あっという間に新年度に入りました。入学や入社など、環境が変わったかたもおられるかと思えます。わたしもプライベートでかなりバタバタしていて、今号は発行までにごしお時間をいただきました。今回はページ数の都合でクロスワードやましがいがさかしページをご用意しました。短歌作品とあわせて楽しんでいただければ幸いです。次号は7月発行、テーマ詠のお題は「雲」です。たくさんのお題は「雲」です。たくさんのお題は「雲」です。たくさんのお題は「雲」です。

編集員 千原こはぎ

今号のうたそら 第20号

- 参加歌人様 56名
- 連作欄 43名
- テーマ詠欄 39名
- 一首評 3名

コラム 永井駿 さん
 エッセイ 工藤吹 さん

ご寄稿いただきありがとうございます！



illustration: kohagi chihara

うたそら 第20号
 ご参加いただいたみなさん (五十音順)

今紺しだ	@inaconsida	桜さくろ	@wjs9f8NwfuJlVq3	古井 朔	@saku_furui
牛隆佑	@ushryu31	西 鎮	@xi_zhen_lvUT	まちけ	@mskpmompomfuwa23
宇祖田都子	@Shinryu2020	白石夜花	@yohana_no_sekai	御糸ちち	@MEATsachi
泳二	@Ejshimada	寿司村マイク	@HksbNR4wv1w78M	深影コトハ	@cotoha_mikage
フ	@hswelt	たえなかず	@suzusuzu2009	水柿菜か	@naka_mizugaki
大坪命樹	@OotsuboMeju	多香子	@kohagi_tw	水也	@m_ya_o
大橋春人	@hachidk2	千原こはぎ	@kroissant_hey_z	深山睦美	@5757_77575
歌島孟	@simn1990	ともえ夕夏	@croissant_hey_z	虫武一俊	@mushitake
がね	@amicus08	中村成志	@nakam8	村田一広	@mucc12022
酒井井戸	@kaionjioe	なぐさひび	@nabeab00	森内詩紋	@Nj40Ev95g1cRpu
河岸景都	@kate_kawagishi	袴田朱夏	@nakamada_shuka	杜崎アオ	@morisaki_ao
かわはろ	@sukanikan_kawa	薄荷。	@aieohimeco	れいあむ	@Re14m_bot
きつね	@001kitsune	ひなち	@hirochin_dos		
きみぐれおゆき	@Oyukimagure	廣珍堂	@yroc6rhzyjEZgwq		
君村類	@kmmr_r09	笛地静恵	@momoka_fukuyama		
香子	@kyoko_shogi	福山桃歌			
くろただけし	@tkuro2016				

計 56名

たくさんのご参加ありがとうございます！



20 リレーエッセイ いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ ソフトクリーム
書き手 工藤吹

アルバイト先の近くにはミニストップとアイスクリーム屋さんがそれぞれあって、でも私はアイスクリームが売っている時間には働いていないから、休憩中にとどききソフトクリームを食べたりして過ごしている。ミニストップはソフトクリーム屋さんと呼んでもいい。そうやってソフトクリームをとどきき食べる日々を過ごしているけれど、アイスクリームとソフトクリームの2択で選べたらいつだって私が選ぶのはアイスクリームだと思う。

好きな音楽に「ウーモー」という名前の、gaburyuさんという人の曲があって、2023年にそれがリリースされて以降はアルバイト先に行く途中の電車ですつと聴いている。ジャケツトには牛の耳が生えた女の子、だからソフトクリームを食べているのかもしれない。ここ2年くらいの間に動物っぽい女の子のことが好きになった。今もどんな好きになっっている。土曜日や日曜日や祝日はアルバイト先が営業していないからソフトクリームを食べることがない。日曜日にとどききと卓月賞という速めの馬たちががんばって速く走る催しを観に行った。結構良い席が取れてうれしい。こういうときにとどききを誘うためにアルバイトをしている。広い場所だとどんなに必死に走っているも悠々と走っているように見えるなあ、と思いつつ馬や馬に乗っている人を眺めて、とどききお金も賭けてみたりして、帰りに売店で小さいぬいぐるみを見繕う。競馬場にはまだ桜が咲いていた。最後のレースまでゆっくり観て競馬場から出ても外は明るくて、まだ夕方だしどうかでほんとか食べようよってとどききと話す。そのままどこに行こうか相談しながら人の多い電車に乗ってふらふらと移動して、今日は暖かいから、乗り換えのために降りた全然知らない駅の

人がまばらなホームでふたりしてアイスクリームを食べた。明るくて暖かくて、すぐ休みの日っぽいと思う。休みの日はそんな感じがする。結局私たちはご飯を食べて、解散するまでに水族館にも行った。岩しかない殺伐とした水槽の前を通り過ぎるときに学校みたいって言ってみたり、とどききは鮫を見て怖いって言って、私は鮫を見て歯が多いって言う。水族館には共通の知り合いみたいな魚とイルカみたいな魚とペンギンがいた。鮫は1匹だけ。ペンギンのいる場所を通るときに強く海の匂いがして、とどききが生きている感じがするって言う。生きてる感じはしてください。仕切りのある小さな水槽に小さなウミガメが2匹いて2匹ともずっと小魚に噛みつきうとして後を追っていたけれど終始捕まえることができていなかった。

水母だけ集まっっていて水槽は、水槽の、海ではありえない光

工藤吹



滯標

雨虎俊寛

行列はギンガメアジの群れとなり海遊館は大きなバケツ離岸流が運ぶふたりは公園へ南蛮船から観覧車から5メートルない山登り プレートを次々に読むお龍と龍馬右舷に「まいしま」を読む海風に大阪市章はためいていて首だけで面舵をきる大阪市消防局の水上署にもある訓練塔僕たちは「とーりかーじ」と旋回し一千秒をかけて歩くさっきのマーク、あの赤いのがそうと言いつ冬の埠頭へ近づいてゆくまだ冬のいやもう春のとなりかな突堤で遠いサイレンを聞く

キリトリセン

井倉りつ

新生活セールで腕時計を買う 掴まれなかった手首のためにおはようのない朝 しずかな昼下がり 約束のない夜のえいえんバカみたいに長い一日(バカみたい)刻まれ続けるキャベツひとたま切るだけじゃ足りない。ごま油のびんでふくるのなかのきゅうりを砕くあきらめてしまえばつるんとした球体 トマトはへたのどこからカビるつまらないことで泣きたい 叶わない、届かないものがほしい6月断絶が適切なのかも キリトリセン 傷つけないし傷つかないし「しかたない」そうだねみんなしかたない。あなたの口癖わたしらうね

連作欄 8首の連作 自由詠 #うたそう

短歌リーディング・コラム 望遠鏡 20

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手 永井駿

テーマ 物体としての短歌

渋谷ヒカリエ八階「渋谷〇〇書店」内の一冊書店「Longbooks」の運営を始めて、早いもので丸二年が経った。短歌ブームと言われて既に久しい、という感覚だが、主に私家版歌集を扱う当店の販売数については初年度が三〇〇冊、次年度が二五〇冊ということで、二年目は前年比八三%という結果だった。その間TwitterはXという名前に変わり、表示されるポストのルールもどうやら過去とは大きく変わってしまった。ここ数ヶ月は何万も

のいいねを記録するいわゆる「バズる短歌」が頻りに観測されていて、情報としての短歌の消費が今後も進んで行くのだろうな、などと感じている。

「情報としての短歌」と書いたが、対義語になる「物体としての短歌」は何かというところ、それはやはり歌集なのだろうな、と思う。歌集は実は厄介な物体で、短歌自体が一首で読まれることに特化して進化したかのような形状をしているのにも関わらず、それが数百の単位にまとまって手渡される。一冊を「情報としての短歌」の羅列と読むのか、一冊に込められているメッセージまで踏み込んで物体として（非本として）読むのかは読者に委ねられるのだが、「情報としての短歌」の読み方に慣れてから歌集を読むと、「歌集を読む」ということのカロリーの高さに驚く方もいるのかもしれない。

「Longbooks」のお客様の大半はXを見て来店される、元々短歌に親しんでいる人が多そうだ。一方、既に文学フリマやBOTHなどで相当数販売され、需要がある層にはほとんど行き渡っている（と想像される）私家版歌

集が、今でもコンスタントに売れてゆくことがある。例えば御殿山みなみ『モモノローグ』やあの井『マカデミアナッツ』、真島朱火『月の食べかた』などがそれにあたる。私家版歌集は一般的に販路が狭く、また作り手同士の売り買いに留まってしまうことがどうしても多いが、そこを僅かでも抜け出してくれているのなら、売り手としてはとても心強い。

せっかくなので、これまで多くの歌集を販売してきた経験から「手に取ってもらいやすい」私家版歌集の特徴を書く。すごくシンプルで、書名と表紙（装丁）に連動性があること、背表紙に書名があること、の二点。装丁にお金をかけたもの勝ちという意味ではなく、歌集が「物体としての短歌」である以上、物体をどのようにデザインするか、すなわちどう目に止めて欲しいかを考えられている歌集は、意外に遠くまで届いていると思う。

私はやはり「物体としての短歌」が好きだ。今後も沢山の創意工夫の詰まった私家版歌集に出会うこと、そして渋谷の小さな棚で皆様と会えることを、楽しみにしています。

屋上猿部二十

宇祖田都子

ものすごく遠いところにある手のひらに現れた猿と逃げ水
眠れない夜のベッドに残された猿の着ぐるみぺしゃんこのまま
はつなつのチーズフォンデュに似た夢を反芻しつつ身体を洗う
フラスコの中に入道雲と猿 シャワーの後の就眠儀式
制服の下の水着が透けるほど汗 屋上にぎっしりと猿
猿を狩る種族が眠る地下室にぼんやり光る悪夢のデコイ
教科書に描いたパラパラ漫画では呼吸もしていなかった先生
一定の速度で円を描きつつ猿の息吹を聞け そして嗅げ

春の五重奏

大坪命樹

咲き満つる桜が毛布と陽だまりが布団の下にまどろみ寝ぬも
入善ゆ長き渋滞八号線 富山が本気の売り出し成功
寝転べば春が陽に照る青空に透くる桜花の梢の天蓋
往ぬればこそ人が命の尊かれときみの眩く 一片散り舞ふ
陽光に輝く流れに降り行けば遙かに沿ひて薄桃堤
山と花の四重奏をば見に行くも黒山混ざりて五重奏なり
人が高さまで差し伸ぶる枝々を触るればなほも優しき桜よ
撮りしかど撮るべからざる美しさ 身体いつばいうつつを吸ふかな

6/1025

大橋春人

蒸し暑い部屋だ一匹ゼニガメがみずでつぼうで遊ぶみたいだ
偏頭痛 ねんりきで割る下の句よ コダック、きみも頭痛薬いる？
十代はだいたいばくはつの片思い本当はビビリだマだったのに
短歌史のピカチュウになることが無理ならミミッキュになりたい私
そらをどぶオーグルの鋭きつばさ 会えない人はどこにもいない
私のなかの二面性 一瞬で姿は変わるギルガルドのごと
ねむれない夜は数えるウールーの一匹、二匹、やがて朝焼け
労働のあとはバルデア観光を スニーカーにじゃれつくニャオハ

無音律を奏でるワタシ

歌島孟

笹の葉が数限りなく鳴く原を心に歩く、寒々として
胎教と海鳴り響く浜にいて歩めば思う未生以前を
(かつて、そんな名で呼ばれていて、たしか) 蟬の音盛る樹下に目覚めた
今まさに聖者は帰り来たのだと、空紅くなれ、クレッシェンドに
取り戻せられない今が夕暮れに焼け落ちてゆく音も立てずに
無響室みたいな闇が好きだった。私はいなくなっても良くて
夜半遠くサイレンがなる、そのようにあなたへ届けたい声がある
大海のような心が日ごと降るなみだを飲み込んで眠るの

お花見

がね

満開の花と並んではにかんで撮られる人を見ていく花見
まだ咲いていない花見るこれからも一緒だなんて楽に信じる
美しく咲けと作った人がいる公園の花美しく咲く
FAXのマニュアルを読む必要とされない人がもつ美しさ
ここからは死ぬ人がいる旅に出る櫻は桜よりもきらいだ
このまんま佇んでたら目の前の桜は夜桜へと変わるらし
咲いても踏まれていても変わらない桜でいてくれてありがとう
花びらが池に、地面に、記憶にも咲いて花見がもっと楽しい

パーティーション

涸れ井戸

良く晴れた金曜日入院になり大荷物持ち亀岡に行く
十時から師長のオリエンテーションションがコインランドリーがあるらし
五角形四人部屋だが見晴らしが良い窓があり山、山桜
面会はまだ禁止でガラガラのリビングからも絶景が見え
担当のナースが声の抑揚で不安の雲を散らしてくれる
春灯は想い出のこと消えてゆき汽笛はトロコ列車からか
カーテンのパーティーションの筒抜け度 英語で電話してるのは誰
知らん間に寝てる幸せ月曜は手術朝イチですと告げられ

工モ

河岸景都

簡単に満月だよと呟いた裏でうさぎが泣いているのに
コンビニで選ぶことすら放棄したソーダ水から泡が生まれる
ただ花の季節が来たというだけで騒がしくなる都会のビルは
朝焼けと同時にごみを出しに行くエモーションナルを裏切っていく
必要なコーヒーなんて無いはずで理由のために飲む黒い水
誰かとは違う誰かになりたくて午前十時にプザーを聴いた
あらかじめ用意されている美しさガラスのペンを折って引つ掻く
ここにある目玉の方がよほど良いインスタントのカメラを捨てた

!!tanka!

野兎のリズムで走ってみたくなるこんなに月が近い夜には

薄荷。

テーマ詠から拝借した
短歌をもとにして描いた
イラストのなかに
10個のまちがいが
あります
見つけられるかな?

ほっとひといき 短歌で
まちがいはがし



Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

一首評

そらよみ



前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
「一首評のコーナーです」

遠くの火事をみて目を逸らす日常のわたしがわたしの敵、だとしたら

小泉夜雨

七音の初句以外はほぼ定型。通常はなかなか体験しないであろう景が初句、二句で詠われているが、これは何らかのメタファーの可能性もある。いずれにしても「日常の自己こそが自身の敵」という認識は、ある意味古い古されたロジックでありながら、「火事」へ「日常」と並立されて詠われることで、主体が自分自身へ向けることになってしまった冷静な批評の視点も読めるようで、豊かな歌の奥行きを感じた。

一首評

西鎮

親友の自慢のヘラクライストがロッチであった時の悲しみ

まさけ

単語が分からないだけで、全体も謎に包まれる歌がある。この歌が正にそうで、不明なのがたった2語なのに全く意味が分からない。こういう場合、安易に検索したりせず、まず自分の知識と想像力のみで解釈していくのが正しい姿勢である(複数人で議論するとなお有意義)。連作を読むと、主人公は昭和50年代に思春期を過ごした男性か。ちなみに私もそうだが、それでも分からない。だから面白い。「ヘラクライストがロッチ」?

一首評

中村成志

でんでんと並ぶ車のその全てツノ出し槍出す雪のパーキング

御糸さち

雪の日のパーキングに並んでいる車をかたつむりに見立てた一首だと読みました。雪が降る日には車のワイパーを立てることがあるらしいのですが、その立てたワイパーをかたつむりのツノ(触角)に例えたのかなあと思いました。「でんでん」、「ツノ出し槍出す」と童謡の「かたつむり」の歌詞を用いているのもあって、ユニークで可愛らしいです。並んでいる車の様子を表す擬態語(?)を「でんでん」にしているのも面白くて好きです。

一首評

西淳子

コンビニ

1番からおにぎりの皮を剥いていくいつも欠けてしまう海苔の端北に5分行ったセブンに無いものが南に5分のセブンにはある
その角のファミマのタバコのラインナップが増えて番号4桁突入
コンビニでチキンとケーキを買い込んで1人で祝うイブとM-1
じんわりと汗ばむ陽気何処からかおでんの香りと冬の足音
真夜中のホットスナックコーナーでへるへるになった肉まん救う
羨ましい君は茨城に住んでいてセイコマートにいつでもも行ける
終電が過ぎた街のコンビニで歯ブラシ買って向かう君んち

かわはらう

救急

あみだぶつを唱える空世のごとくあれ……生けるとしゃぶつこみ上げて吐く
雑踏のまばらな宵をまっすぐに這うGの足 救急車待つ
つつがなく生まれた地区へ救急車よ凱旋をせよ 急急如律令
いけめのきゅーきゅーしさんおいしやさんかんごさんのじゅうじの家紋
五番目の救急ブースに運ばれてカンダタになる管がつながる
空中の水風船にぶらさがる祭囃子をそそがれながら
みくまりのきよきながれへ刺す針の瀬替えが犯す富栄養化
いつもなら肩をのばして今はただストレッチャーで伸びている夜

きまぐれおゆき

四月の散歩

ときおりは負けず嫌いを出しつつもそれぞれ進む川沿いの道
新築の窓開かれる 県外のナンバー付けて並んだ車
できるだけ「怪しくないよ」の顔をして住宅街をあてなく歩く
それなりの貫録を持つこの家に町内班班長のプレート
この道に五軒並んだ村山家同じ苗字でこんなに違う
歩道橋から俯瞰したなら複雑に感じた道が意外とわかる
すれ違う人類みんな善人と思ひ込んで犬が近づくと
春風はやや強く吹く 花びらの中を進んだ四月の散歩

きつね

生存確認

雨の日は傘を開いて守るのに会話のときはむき出しのからだ
相槌のバリエーションが増えていく代わりに自分が薄らいでいく
大変なことに大変だねと言葉が風にそよぐ様を思った
ぎつしりと詰まった氷がゆつくりと水へと戻る そんな悩みを
海流の果てに形成されていく砂州に似ている言葉の上に立つ
ほんとうはひとつの入り江としてひらくところを持つてうまれたはずだ
大丈夫、大丈夫って繰り返す海嘯はきつと止みそうにない
一艘の船を見送る面持ちですべての夜を見届けている

君村類

「そらよみ」一首評募集



ご投稿はこちらの投稿フォームから!



前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。

お一人につき一首まで。

ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。

初めてのときも二度目も何度でもその横顔に風は乱れて
 性別や年齢だとか立場とか きつと君とは友にもなれない
 夏木立 焼き払うような愚かさでそばにいたいと言えよよかった
 共に見る夢なら綺麗でなくていい本当も嘘も両方ください
 孵化させること許されぬ光なら硝子に詰めて夜空に飾る
 この恋を忘れたくても二人には思い出の曲すらなくて透明
 道迷い正しく歩むと決めたとき君へと続く地図は燃やした
 この痛み知るためだけに出逢ったの もう来世では探さないでね

羽虫

くろだたけし

木と草と虫と土とが雨の中混じりあつたらサカナのにおい
 雨の日は同じところに水たまり誰のものでもない道の穴
 売り物のお肉の価値は数よりも重さで決まるから買いやすい
 半分に切ったレタスの断面は迷路のように見えても牢屋
 早足で歩きはするが走らない信号だつてすぐあきらめる
 前だけをしっかりと見て行進は落とし穴には全然弱い
 髪型は気にするくせに伸びたならばさり切られてしまう街路樹
 われわれとわれの割れ目は閉じ難く季節が来れば生まれる羽虫

夕闇の二月堂まで連れ立ちて松明駆けるお水取りを見つ
 早々と火を落としたる炎あり担ぎし僧の様を思いぬ
 歌を詠む人らと飲める春の夜 一期一会は古都のならわし
 よそ者をほんまの笑いに誘いたるわらじのような紅しようが天
 偶然を必然にする出会いかな名刺に淡きさくらひとひら
 朝映えの五重塔に見おろされ迷わずえらぶエッグベネディクト
 遠まきに神の使いは占えり鹿せんべいを持たぬわたしを
 リラの香の薄様がいい いつの日かひそやかに詠む春の歌集は

ディテール

西鎮

あのひとと暮らしていれば来なかった四月の汽水域をみていた
 逆光のキッチンでエプロンを脱ぐ姉にほとんど母のディテール
 沈みゆくおたまじゃくしがこの沼の岸辺に立てるデボン紀の波
 あの頃の葛藤の爪あととして写真のきみはわずかに痩せて
 はらはらと白木蓮の花びらの過ぎゆく春の置き手紙めく
 それぞれの岐路や退路を委ねられしずかに進む始発のメトロ
 少女らが正しきことの危うさに気づきはじめる風向きでした
 きみの去った五月の空の湿度にも近いブルーのネイルを選ぶ



◆ まだ荒野だった僕らの行く先に射した光を希望と呼んだ

◆ 福山桃歌

◆ 野に咲くは野薔薇野薔薇バラバラになりたい野ばら野に咲く野ばら

◆ 古井 朔

◆ 野性味がないと言われた夜に舞う子犬みたいな君のエチュード

◆ まさげ

◆ 兄妹の共同作業 野菜室にそそがれた父のゆまりをすすぐ

◆ 御糸さち

◆ 春の野に恋人未満とじゃれあつて八分音符に跳ねる足跡

◆ 深影コトハ

◆ 誰だつていつかは大人になるのだよ。野原しんのすけ君、きみもね。

◆ 水柿菜か

◆ 荒野にも咲く花がある囁いて置いていかれた雫が散った

◆ 水也

◆ ひとりひとり曠野を内に抱えつつ灌木のような生業を成す

◆ 虫武一俊

◆ 野良猫がつかずはなれず絶妙な距離を保つて寛いでゐる

◆ 村田一広

◆ 薔薇も百合も鬱金香も元々は野にあることが自然なはずで

◆ 森内詩紋

◆ 風見鶏みたいだよ顔さがすひと毎日ちがう野原はこわい

◆ 杜崎アオ

◆ 草のうえ、大の字になり深呼吸（おなかが春でふくれちゃうわね）

◆ りんか

◆ あをあをと背高のつぼのノコギリ草疾く切つてよ全部ぜんぶ

◆ れいあむ

テーマ詠 「野」

- ◆ 河岸景都
◆ 君村類
◆ 西鏡
◆ 白石夜花
◆ たえなかず
◆ 千原こはぎ
◆ ともえ夕夏
◆ 中村成志
◆ 袴田朱夏
◆ 薄荷。
◆ ひなお
◆ 廣珍堂
◆ 笛地静恵
- 本当にやりたいことはずっと無い野良犬みたく街を歩いた
焼け野原をうつくしいと言うあなたにもあった甘えを思う子どもの日
ただ雨をあなたと待った末黒野の匂い いつかは話す性癖
気紛れに荒野が見せた蜃気楼 此处で朽ちてもいいと思えた
春先の野をゆくときに唯一の手荷物として認めるボール
灰色の日々に辞表を投げつけて風受けつつもゆく春の野辺
愛嬌も度胸もあつてこひびとにしたいと思ふ野良猫がある
昨日までは耳と尻尾は見えてたし野原も今が成長期だし
野菜から野菜ジュースをしぼり取り人をあまねく健康にする
野兔のリズムで走ってみたくなるこんなに月が近い夜には
野原にはオオキンケイギクの黄が溢れ映画「ひまわり」を思い出す
君はもうひむがしの野ぬとなりしかも音なきままにひかり射し来ぬ
生成 AI に愛をさとされ清々とひとりぼっちの朝の荒野へ

五月物語

寿司村マイク

顔の良い妹を持つ苦しみは持った姉だけしかわからない
風薫る月にわたしは爆誕しさつきと読みます五月と書いて
妹は火付盗賊改方鬼の平蔵からの芽衣です
身長もあつちに負けて体重は誰にも言ったことはないです
通学が同じなだけで告白してきた他校のサッカー部員
アイドルに興味はなくて細い首ゆらして聴いている邦ロック
友達への手書きメッセージの横の高橋よしひろ系の犬の絵
おもいきり夜中に切った髪型はスピンオフならヒロインになる

インターネット・ドリーミング

たえなかず

たった今平凡だけど幸せな一生を終えたけど何か質問ある？
生きるから そんなふうに割り切った時期が俺にもありました、春。
幸せになれや祈るでワイだけは（それってあなたの未練ですよね？）
守るニヤと猫語で求婚 同じこと何度も言うよこのサバンナで
「インスタもXもやめた」（あつ…（察し））無個性さえもあなたのひとつ
ここは俺の日記帳だから夏までの悲恋は適度にチラシの裏へ
久しぶりに会えたあなたは完璧な沈黙だった 無理ゲーだった
どうみても通り雨です。うたかたの恋、本当にありがとうございました。

夏は来ぬ

多香子

ヒヨドリとメジロの定期演奏会終れば花は散らされており
過ぎてゆく時をとどめるすべもなく風に桜の命を想う
永き世を籠の中からのぞき見ておかめインコは嘘も喋れる
朝焼けにちぎれた糸のきれっぱし 近くて遠い人の約束
コロナ禍で閉店したる猫カフェのきれいな「ミミさん」元気だろうか
雨もやみ同じ哀しみ知る同土虹の話をしてみませんか
いつもより春は急いで行きすぎぬ、もう冷奴だね夏は来ぬ
倒れ伏す卵の花の泥を手で払い明日は晴れるよ良い日と思う



テーマ詠「野」

それくういでは

千原こはぎ

雨ばかりふる春だったきみと逢う日は運命が泣いているようで
この街にきみが在る異質にもすこし慣れてゆくいつもの大通り
人の顔を見ないわたしがたまに見る横顔やつと逢えた気がした
大丈夫 くそださシャツでも大丈夫 それくらいでは消えない火だよ
そうか、手はこんなにあなたかかったつけ 自分じゃない熱は肌溶けて
どうでもいい話もしたいどうでもいい話はきみとだけ話したい
残されたほんの数分でもふれていたいとわかる手の広げかた
雨の夜 ごめんね、すべてに謝って ちゃんと離れるまでは泣かない

のぎへん

ともえ夕夏

どこで積んだ徳だつたらうわたくしの分のひじきが山盛りである
税金に潰されさうな私からのぎへんとれば無だけが残る
五年前に始めた外貨積み立てが殺し屋みたいな存在感に
上がらざる肩、見えにくい目はやがて名前をもらひ『症状』となる
姪子めいこの受験の話をおとうととふ禿げてしまひしおつさんとする
春なんてすぐに終はつてしまふから七分袖など一枚もない
祖母も母もをんなのくせにひきだしに血赤珊瑚を眠らせたまま
人々の々の役目ひとを与へられうづくまりたる私にも春

むりむり

中村成志

葉桜の見苦しさの中ふかぶかと息を吐き出す やつとおわつた
膝を突き上着を脱げば畳から夕日が沈んだあとのぬくもり
両の掌を鳴らしてのちにむりむりと剥がせば皺の紅食い違う
宵の口の驟雨の影に鳴く虫よ熟睡するにも体力は要る
右端へ黒く濁った月が出て寒さの風に閉じるたんぽぽ
春の園の胡弓のように抱く猫の腹のふるえを読み込んでいく
川べりに大水たまり月光の作つた道が壊れてもどる
重力は春ほど強くスキップのまだまだできるつま先であれ

春・rip

なべとびすこ

もう冬を二回こなして冷凍庫に入れっぱなしのパッションフルーツ
もう梅は終わっちゃっててまださくらは始まってない春の幕間
温室に入れば色づいている世界 咲くのは僕のためとかじゃない
「植物にさわらないで」の植物の絵は3種類 手は1種類
咲くときは一斉に咲くそういうの嫌いな自分と思つてたのに
「まあさくら見ればいいか」バス停で知らない人と見ている満開
やさしいと思つてますか 影じゃないとこを光と呼んでいるだけ
「花粉やばいけど元気です」春・ripみたいな写真と一緒に送る

色めいた声で名前を呼ばれば突風が吹き焼け野が原に

◆ あきの つぎ

野の花の質素な笑みで思い出す幼馴染のぬくい眼差し

◆ 麻倉ゆえ

はつなつの野に咲きほこる花たちの花言葉だけ教えてほしい

◆ 雨虎俊寛

野っ原で採った野苺の酸っぱさ 次は子どもが感じ取る番

◆ ayumi

真夜中の爪あをく塗り夢の野にはだしていつてはだしてかへる

◆ 有村桔梗

降りるのを忘れて乗っているときの野原を歩く毛のない子ども

◆ 池田竜男

野の花は雀の鉄砲・母子草・ヒメツルソバが道路に生えて

◆ 石川順一

葉の上の丸々とした白露が光の羽を四方にひらく

◆ 石少山裏裏

伝説のウサギとカメを野に放ち身軽になって北へ飛び立つ

◆ 宇祖田都子

坂道の向こうへ自転車を漕いで忌野清志郎にはなれない

◆ 泳二

春野原あなたのもとへ駆けてゆく寄り道ばかり道草のたび

◆ hs

海と見た落武者達の絶望が白花色の野にゆれている

◆ 歌島孟

山野草図鑑を古書店で入手ニワトコの木はこれで覚えた

◆ 酒井井戸

猫街道の向かふには

村田一広

真つ青なソーダを飲んだ君の眼の涙が青い。焦つてる僕
 ボルドーのワインボトルを手に取れば軽くて空っぽの骨董品
 期待通りレモン色して並んでる本当は真つ白のビタミンC
 (放置するとスマホが破壊されます) の広告放置するの二回目
 ゆつくりと来てゆつくりと登つローカル線 時のとまつた青田ひろがる
 猫をよけ猫をまたいで月淡き猫街道をたどつてわが家
 真つ暗な山の中腹にしがみつく駅は最小限の灯りで
 意味もなく空へ伸びゆく急坂の石段 夢の景色さながら

りすべくと

森内詩紋

堀の水青く光りてその底にうたを隠せる 見えずとも恋し
 田舎には田舎のネズミ一欠片のチーズを得ればうたは朗らか
 季語の力たのんだうたが多いゆえそのうち花に嗤われるやも
 何を視る何処へ向かう吾のうたは 暁まではあと50分
 △と○と□をならべたらおでんに見える?それとも禅画?
 マジカルな力がうたにはこもるからエモさに皆が倒れ伏すんだ
 ジャズのごと詠みたいそして読まれたいまだあやふやなスタイルだけど
 でもいつか追いつくつもりで歩いてる高嶺の花の元へ、元へと

絶対

袴田朱夏

くちやくちやの(だめだ)わたしのハンカチで拭いても(だめだ)よく洗つても
 広告をぜんぶ浴びつつ子とのぼる都心のエスカレーター長い
 地球から引つ張られては地球から押し返されてみんな偉いよ
 この子らもいつかはやさの言いなりになるのだろうね新快速ね
 絶対なのにそこそこのってわたしだなわたしにもある絶対音感
 大人だからさびしくないよと言えば子がそれはさびしいよねと答える
 判断をしないできないいさわらないくじ運だけはよくても悪い
 百円の毛玉取り器の百円の仕事とおもうもう動かない

夕日のきれいなところ

薄荷。

ひと息に池の上まで伸びてきて光と遊ぶ藤の花房
 シャボン玉たくさん飛んで穏やかな春の終わりの空は青いろ
 参道で寝そべる猫もマンモスと同じ広さの夢を見ている
 めでたしで終わった夢のつづきなら地下室の棚で眠っています
 お土産でもらったペンのインクから三千キロの異国の香り
 つやつやの丸い小石のふるさととはきつと夕日のきれいなところ
 空っぽになった気がする肉体は春の名残りを詰める容れ物
 振り向けばどこまでも空は広がって暮色に沈む葉桜の道

喪春

れいあむ

むしくいの中にひと花芙蓉あり毛虫住まうも影さえ桃色
 小春日の手すりの先に爆ぜる音霜すら知らずとけゆくまどろみ
 雪雨に珈琲啜る昼を刺す君の遺した乱反射の粒
 枝ぶりの末広がり松葉あり腕のようだと祖母がつぶやく
 桜蔭のさなかひとり眸をとざす透ける朱色を目蓋と知つても
 葉の覗く桜樹仰ぎ喪つた春を目で追い呻くもひとり
 花影に揺るるリュックのべたんこな輪郭に湧いた「アオハル」の文字
 蒲公英の行き倒れてもなお鮮やかなイエロウソとして朝がはじまる

さくう

ひなお

満開の桜はカエルの卵が枝にひしめいているようだ
 公園の芝生のうえにきらきらと光をあびて落ちる花びら
 散歩路につむじ風が立ち花びらがくるくると回る
 がたがたと雨戸を叩く風の音2時間おきに覚めてまた聞く
 雨上がりの朝 散歩道が花びらで一面桜色に染まっている
 昨日の嵐で車道の花びらが流され今日は朝からの快晴
 雨の止んだ舗道さくらの幹が黒く花が浮き立って見える
 国際技能センターの庭 染井吉野がおわり牡丹ざくら満開

サボれ

廣珍堂

営業の呪ひを君は知らぬだらうこのごろ瘦する先輩が言ふ
 携帯はサボる時間を削りつつ生産性も押し下ぐるらし
 僕はもう胸がちぎれてしまつたと退職依頼の列さへ崩る
 株あがり給料下がることわりが経済のひとつ、夜も働け
 売り手市場なれども下る坂もありあのちゃんの歌を聞いて出勤
 居眠りと眼精疲労と腰痛がビル空調で循環してゐる
 パソコンを広げて仕事するふりも新幹線は等しく運ぶ
 手作りの弁当独身メンバーが鍋を始むる昼休みかな

辣韭換歌

笛地静恵

幽閉の壁の内なるいつわりの皇帝慈悲のセリアのオペラ
 飲み会のあいつはどこへ消えたやら安心してください吐いてます
 押しはキュンです八丈島のキョンですキャンディーズです
 ラッキョウをミジン切りしてツナ缶をマヨで和えればおおいスキーマルカリで《ネクロノミコン》ゲットしたおや誰か来たようだ丑三つモノホンの《事故物件》に住むあの子ダイエツトには成功してるマツコの知らない世界の外側のマツコの知ってる世界を知らず晩年のソメイヨシノのいさぎよし末期の花の垂れ下がりがりけり

永續的墜落

福山桃歌

こうすればいいの、と強く振り曲げたところがひどく軋んで痛む
 泣き言を言うなよずっとこのままでいいと縫った夜がこわれる
 甘えてもいいんだ何度なじつてもどこにも行かないことを知ってる
 寂しさを孕む奥底 辿り着くことばは沈むあたたかいまま
 とめどなく光は射してまっすぐにそのまま折れてしまおうだろう
 離さない 誰かに取られるくらいならゆっくり噛んで潰してあげる
 繰り返し再生してるさよならを遺言みたいに抱きしめている
 気がつけばなんにも残っていなかったからっぽの手はひどく冷たい

自分で何とかしろメロス

御糸さち

グループを切り替えながら会話する私A私B私C
 十年ぶりの友は律儀に十年分老けてて笑う こどもみたいに
 浅草の昔ながらの喫茶店 昔のことはしらないけれど
 信じてるよ 建築基準 法律もそれを守ってくれるみんなも
 君のリングと私のナシが天秤にのせられている(君に)(勝手に)
 僕は君の連帯保証人になれないよ いつかまたマックで笑おうよ
 にんげんがこわい、とLINEするときの表記に迷ったまま十五分
 黒歴史だって歴史だ来年の予定表にはまだ何も無い

移動動物園の春

深影コトハ

下の名で呼んでくれない人と居る移動動物園に巡りくる春
 人間の歩き方して花を嗅ぐミアキャットよそれが桜だ
 大切にされすぎている一日の鞆の奥にある不発弾
 心臓が時々鳴いて胸骨を間借りしている鳥がおどろく
 草の上の露に映ったさかさまの未来で笑っている私たち
 ここから第二章ですタンポポがアレグレットに飛んでゆきます
 うたた寝をしていたでしょうキュービッドさつき初めて手が触れたのに
 半分の確率くらいでちょうどいい(ザオラル)小さく呟いて、恋

明晰夢／カルペ・デイエム

古井 朔

見つけたの夢見鳥をその指は光る風に戯れる番いの蝶を
 夢で見た話の続きを書いてみるこれはきつとハッピーエンドにはならない
 かつてフラジールと言ったあのひとはあまりに脆く儂く消えた
 さまよって辿り着いた先にあつたのはひとつの寓話きつと愚者の物語
 畳まれた記憶のペールを切り刻みやがて燃やして土に返そう
 記憶すら氷河の中に閉じ込めた春など来ないここは永久凍土
 臙げに見えているのは過去の自分で見えない闇は今の自分だ
 だんだんとおぼろな記憶の明晰夢 カルペ・デイエムと唱えたからか

梅がこぼれた

まさけ

戦争をしない国にてミサイルが飛んだニュースをみてる寝ながら
 テトリスで対戦をするウォロデイミル、ウラジーミルと。イーブンだった
 迷彩を着ると無言になる祖母がひとり見ていた雲のない空
 やがて雨、全て閉ざしてしまふよに増してゆく雨 梅がこぼれた
 吹きすさぶ雨に打たれる竹祖父は御国のために果てたと聞いた
 朝焼けに光る蜘蛛の巣今日もまた平和にぼけてパンを焦がした
 祖母作の味噌汁の香昇りゆく天の祖父まで届けと願う
 戦いはお座布の上でええんやと矢鱈と祖母が強いこいこい

青灰の春

水也

額縁のなかに『わたし』を閉じ込めて駆け出してゆく制服のきみ
 星になる夢を見ていたうたかたの日々を知らない雛鳥たちは
 いつかとかきつとのために生きていて あわれでうるわしい花よ咲け
 絶頂のまままでいきたい終わってスポットライト止めないでいて
 淡い夢鮮やかに描かれてゆく舞台を降りるときは間もなく
 途切れてく永遠だけを重ねるのほつれたドレスもう着られない
 刹那見て今がいちばんうつくしいさらなる果ては欺瞞をかたる
 灰色と青を重ねて薔薇色になるわけないよ春は埋めたの

木馬脱走

深山睦美

消火器を持って走り回っているあの子も校長も人体模型も
 そうこれは木馬が脱走した時に手首についた二本の轆
 もうだめだムーミン村に引越します裁判所無きムーミン村に
 風を見る ねえ風見鶏きみのいう風って風の去る背中なの
 大切な人の臓器と思えば捨てなくてすむ古いパプリカ
 存在しない苗字ばかりが売れていく冥界ゲート前の判子屋
 波蹴躑 地図の読めない僕たちはまた横浜を縦浜にして
 足もとが悪いだなんて言わないでみずみずしく光ってもいた